

# 先人の知恵から

## 53

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は「め〜も」まで以下の8つ。残すは「も」の残りと「や行、ら行、わ行」のみ。今年度中には終わりそう。あと少し。

- 名馬に癖あり
- 目は口ほどに物を言う
- 目は<sup>じょうもう</sup>毫毛を見るもその<sup>まつげ</sup>睫を見ず
- <sup>めんじゅうこうげん</sup>面従後言
- 面面の蜂を払う
- <sup>もうぼさんせん</sup>孟母三遷の教え
- 物は相談
- 物は試し

### <名馬に癖あり>

すぐれた才能を持つ者には、普通の人にはない癖を持つ者が多いことのとえ。また、大人しくて個性が無いようでは、非凡な

働きは出来ないということのとえ。名馬と言われる優秀な馬には何かしら癖があるということから。「名馬に難あり」ともいう。

完璧な人間などいない。世の中、何をとっても完璧などということはないはずだ。しかし、どうも完璧主義が横行していると感じる現代においては、運動や絵を描くこと、字を書くことが苦手だったり、動作が遅かったりと、「何かができない」ということだけで、まるで欠陥があるかのように扱われることがある。

何かに秀でている分、別の何かが悪っているというひともいる。得意不得意の「でこぼこ」があるのは当たり前のことなのに、なぜ人は他人に完璧を求めるのだろうか。

保護者は子どもに、先生は生徒に、夫は妻に、妻は夫に完璧を求める。何でも100点でなければいけないのだろうか。

「文武両道」という言葉があり、学問にも武道にも秀でた人がいないわけではない。しかし、それはほんの一握りである。

我が子や身の回りの人に完璧を求める前に、自分自身も完璧ではないことを自覚し、子どもに対しては得意分野を伸ばすように心がけてほしい。そんな思いを込めて、私はこの諺を伝えている。

欠点は目立ちやすいものだが、そこばかり見ていては長所を見逃してしまう。良い面を見て長所を伸ばし、平均的で平凡な人間ではなく、何かに秀でた人間を育ててほしいと思う。

### <目は口ほどに物を言う>

情を込めた目つきは口で言うのと同じくらい相手に気持ちを伝えるということ。また、嘘をついたりごまかしたりしても、目を見れば真偽のほどがわかってしまうということ。「目も口ほどに物を言う」ともいう。「目は心の鏡」「目は心の窓」「目が物を言う」「目は人の<sup>まなこ</sup>眼」はすべて類語。

人の感情を読み取るには、その人が発した言葉だけでなく、さまざまな情報をキャッチして初めて理解できるものだ。その中でも、目は実に多様な感情を表してくれる。

「人の話を聴くときは、目を見て聴きなさい」と、小学校のときによく先生に言われたものだ。しっかり注意を向けなさいという意味だとは思いますが、目を合わせるのは緊張を伴うし、ずっと目を見続けるのはしんどいと感じる人も多いだろう。

常に見つめ合うという意味ではなう、」嘘をついたりごまかしたりすれば「目が泳ぐ」し、怒っているときは「きつい目」「吊り上がった目」になる。「目尻が下がる」と嬉しそうに見え、笑っているときは目が細くなるが、時には「目だけが笑っていない」こともある。このように、目があらわす感情は多い。

人の感情を読み取るのが苦手な子どもたちには、目や表情を手掛かりに、感情を読み取る練習をしてもらうことがある。言葉が通じなくても、目や表情を見ることで伝わる者はある。

発語の遅れがあるお子さんや、病気や障害で言葉を話せない人でも、表情や目の動きから意思を読み取れることがある。。そういう意味でも、私たちは日々の目つきや表情を大切にしたい。

言葉が通じなくても、目や表情を通して伝わるものがある。だからこそ、人と向き合う時には、言葉だけではなく、その人の表情や目にも目を向けてほしいと思う。

英語では・・・

The eyes have one language everywhere. (目は万国共通のことばを持つ)

### <目は毫毛ごうもうを見るもその睫まつげを見ず>

人のことは小さな欠点まで良く見えるが、自分自身のことはわからないものだということだ。目は細い毛のようなものまで見る事ができても、自分のまつげを見ることができないという意から。毫毛＝ごく細い毛。「目で目は見えぬ」も類語。

出典 史記

自分のことを棚に上げて、他人の悪口ばかり言う人がいる。自分を客観視できない人に対して、この諺を使うことがある。

自分の睫を見るのが難しいように、自分自身をしっかりと見ることは案外難しいものだ。自分を知るには、自分だけではなく、他人の目を通して初めてわかることもある。

他人から自分の欠点を指摘された時には、一度立ち止まって考えてみてほしい。できれば他の人にも聞いてみて同じようなことを言う人がいるかを確認する。そして、「自分がそのように見られている」という事実を受け止め、必要であれば修正していくことが大切だと伝えている。

最近の友人関係では、関係性を維持するために、本人の欠点をあえて指摘しないことも多い。しかし、自分自身で気づけないとき、誰がそのことを教えてくれるかといえば、親しい友達か家族くらいしかいないだろう。それなのに、友達も保護者も子どもを褒めるばかりで、欠点や改善したほうが良いところをまったく指摘しなければ、

本人は自分の課題に気づけないままになってしまう。

もちろん、ただ欠点を指摘すればよいというものではない。良い方やタイミングは大切だ。しかし、本当のことを言ってくれる人、自分では見えないところを教えてくれる人がいることは、とてもありがたいことだ。

自分の欠点に気づき、修正するのは早い方がよい。大人になって、あるいはかなり年齢を重ねてから指摘されても、それまで「自分は上手くやってきた」と思っている人にとっては受け入れがたいだろうし、修正することも難しくなる。

本当のことを言ってくれる人、自分の悪いところを指摘してくれる人こそ、自分のことを思ってくれる人なのだと、この諺とともに伝えるようにしている。

### <面従後言めんじゅうこうげん>

その人の面前では服従するように見せかけて、陰では悪口を言う事。面従＝人の前でだけ服従すること。後言＝かげで非難すること。「面従背毀めんじゅうはいき」「面従背否めんじゅうはいひ」「面従腹背めんじゅうらくはい」「面従腹誹めんじゅうらくひ」も類語。

出典 書經

子どもたちは、大人の言うことになかなか逆らえない。もちろん大人の方が体も大きく力もあり、口も立つから仕方のない面はある。

しかし、同年代だったらどうだろう。

友人関係において、相手に服従する必要はない。関係性は本来対等であるはずだ。とはいえ、相手の方が力が強い、体が大きいなど、「勝てない」と思うと卑屈になってしまうことがある。その結果として「面従」になり、陰で愚痴を言い、非難することになる。

学校の先生に対して表面的には良い子を演じ、裏では先生の悪口を言いまくる、ということは子どもたちの世界では珍しいことではないかもしれない。しかし、同年代の友達同士でそれをする、悪口は思わぬところから相手に伝わり、関係性が一気に壊れてしまうこともある。

人の悪口というのは必ず伝わるものだ。だから、まず悪口は言わないこと。そして、自分の思いを我慢して、相手にばかり合わせるのもやめること。

嫌な事は「嫌だ」と言ってい。納得できないことには「それは違う」と伝えてい。対等な人間関係を作るためには、相手に合わせるだけでなく、自分の気持ちを伝えることも大切なのだと、この諺を通して伝えている。

### <面面の蜂を払う>

人のことを批判する前に、まず自分の欠点を反省しなければいけないということ。人のことをあれこれ世話するより、自分のことをきちんとせよということ。「頭の上の蠅を追え」は類語。

二つ前の諺とも関連するが、自分の欠点がわかれば、それを反省し修正することが大事である。他人の批判が先に来てはいけない。

また、おせっかいと言えないこともないが、自分のことは棚に上げて、他人のことばかりあれこれと世話を焼く人がいる。誰かの世話をしている自分しか認められない人は、このパターンに陥りがちだ。そんな人には、まず「誰かの役に立っていない自分」も含めて、「それ以外の自分」を認めることから始めてほしい。

学校では互助精神というか、お友達と助け合うことが推奨されており、それ自体はとても大事なことだろう。しかし、自分のことが終わってもいないのに、他の子の世話を焼きたがる子がいる。そういう子どもたちにはこの諺を伝え、その意味を丁寧に説明している。

大人になっても、誰かのためになっている自分でしか存在価値を見出せない人間にはなって欲しくない。人を助けることと、自分自身を大切にすること。その両方ができる人になって欲しいと思う。

### <孟母三遷の教え>

子どもの教育には、良い環境を選ぶことが大切だという教え。「孟母の三遷」「三遷の教え」ともいう。 出典 古列女伝

この諺は、孟子の母親が子どもの教育のために最善の環境を求め、3度も住まいを移したという逸話から生まれた。

子どもの教育のための「最善の環境」とは何だろう。

これは、よく考えねばならない。決して贅沢な環境という意味ではないだろう。その子の持つ資質もちろん大事であり、孟子であれば、きっとどんな環境でも立派に育ったのではないかとも思う。

しかし、子どもにとって明らかに「悪い環境」というものは存在する。毎日のように大人がお酒を飲んで騒いでいるような環境や、両親が大声で喧嘩したり罵り合ったりする様子を見ながら育つことは、子どもにとって決して良い環境とは言えない。

以前、学校に不適應感を持ったお子さんの母親から「今の学校が良くないから別の学校に行かせる」と相談されたことがあった。どこを考えているのかと聞くと、遠く離れた寄宿制の学校だった。ホームページを見て教育方針が良いと思ったという。しかし、その地域に知り合いはおらず、母親自身もその地域に行ったことがないと言う。

子ども自身が行きたいと言っているのなら一つの選択肢ではあるが、その学校の良さは、実際に行ってみなければわからない。母親から離れて寄宿生活をする不安も楽しみもあるだろう。決めるのは母子家庭なので、母親と本人である。このケースの場合は、母親の干渉が少し強すぎたため、

子どもが一度母親から離れてみるのも良いかもしれないと思った。しかしそれはあえて口にせず、まずは本人とよく話し合うこと、一度一緒に見学に行ってみることを勧めた。

この母親のように、「いじめにあった」「不登校になった」と言っては学校を替えたいと相談してくる保護者は少なくない。その子の状態によっては、いじめが酷い場合など、他の学校に替わることも「選択肢としてある」とは伝え。しかし、転校したからといって絶対にいじめにあわないという保証はないことも同時に伝えている。

どの保護者も子どものために一生懸命になるのは当然のことだ。しかし、環境を変えるというのは、最後の手段として考えるのが良いと筆者は思う。できることをあれこれやった上で考えないと、安易に環境を変えることで問題から逃れるというパターンを身につけてしまうかのうせいもあるからだ

では環境調整で大事なことは何か。

それは費用や設備などの豪華さだけではない。バランスの良い食事があり、勉強ばかりでなく体を使ったり、興味や関心を育てたりできる環境。そして何より「親の思いの押し付けではないこと」ではないだろうか。

その子に合った環境を模索することが親の務めであり、それは必ずしも親が望む環境とは一致しないかもしれない。

親が「良い」と思う環境ではなく、その子にとって「良い」環境とは何か。

そういう多角的な視点を持てる保護者であってほしいという願いを込めて、この諺を伝えることがある。

### <物は相談>

一人で考えこんでいないで、誰かに相談してみると、案外うまくいく場合があるということ。また、相手に話を持ちかけたり知恵を借りたいときの前置きの言葉。「物は談合」は類語。

子どもたちの中には、人に相談できない子が結構な割合で存在する。

「どう話し出したらよいのかわからない」

「こんなことを相談したら笑われるのではないか」

「自分の恥を晒すようで怖い」

などと考え、結局一人で抱え込んで煮詰まってしまうのだ。

学校で困ることがあったとき、誰に相談できるか。それは不登校になるかならないかの瀬戸際で、とても大事な視点である。

担任が信用できれば担任でもいい。養護教諭でも、信頼できる他の先生でもいい。もちろん親兄弟、友人、塾の講師など、自分の周りにはいろいろな人がいる。その中

で話せる人が一人でもいれば、問題が小さいうちに解決に至るもこともある。

人は自分の悩みや問題を誰かに話すことで、気持ちを整理したり解決の糸口を見つけたりする。話すだけですっきりすることもある。解決そのものが目的ではなく、「誰かに話せた」という体験自体が重要だったというケースも多々ある。

LINE や SNS での相談から始まり、最近チャッピー（ChatGPT）など AI に相談することも増えた。相手が AI であっても誰にも相談しないよりは一歩前進なのかもしれない。ただ、できれば生身の人間との関わりも持ってほしいと思っている。

親にもなかなか相談できず、友人もそこまで信用していない、先生などはもってのほか……という子どもたちにとって、相談できる先はオンライン上の友人かチャッピーになってしまうのかもしれない。少し寂しい気もするが、それでも「誰かに相談する」という経験そのものは大切だ。

相談を持ち掛けるときには「物は相談なんだけど……」とこの言葉をクッションにするといいよ、ときっかけ作りとして伝えている。

### <物は試し>

どんなことでも、やってみないと結果はわからないものだから、最初からだめだとあきらめないで、とにかくまず試してみるべきであるということ。

失敗を恐れる子どもたちに、この諺を伝えることは多い。

失敗から学ぶことは多いのだが、失敗しないようにすればするほど失敗が怖くなり、新しいこと、初めての事にチャレンジする気がなくなってしまう。

大人になってからの失敗は確かに痛手が大いものだ。しかし、子どもの頃の失敗は「恐るるに足らず」である。エジソンのフィラメントの話なども出しながら、やってみたいこと、興味を持ったことは試してみようと伝えている。

最近の子どもたちは、無難に過ごすことばかりを考えていて、元気がないように見えることがある。もっと前向きで、活発な子どもたちになって欲しいと、常々思っている。何でもかんでもとは言わないが、できればいろいろなことを試して、失敗もして、成功もして……。

そんな豊かな経験を積み重ねながら、自分の世界を広げて行ってほしいものだ。

## 出典説明

### 新約聖書・・・

1世紀から2世紀にかけてキリスト教徒たちによって書かれた文書で、「旧約聖書」となるキリスト教の正典。27の書が含まれるが、それらはイエス・キリストの生涯と言葉（福音と呼ばれる）、初代教会の指導者たちによって書かれた書簡からなっており「ヨハネの黙示録」が最後におか

れている。「ギリシャ語聖書」と呼ぶこともある。イエス誕生前までを旧約聖書、イエス生誕後を新約聖書がまとめている。

### 史記・・・百三十巻

中国古代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏・殷・周・秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

### 書経・・・

五経の一つ。太古の伝説上の帝王<sup>ぎょうしゆん</sup>堯舜から春秋時代までの、模範となる帝王の<sup>しょうちよく</sup>詔勅を中心に政治理念などを記した歴史書。孔子が百編にまとめたと言われるが不詳。秦の<sup>ふんしよ</sup>焚書によって散逸し、現存するのは東晋の<sup>ばいさく</sup>梅賾による「<sup>こうあんこくでんこもん</sup>弘安国伝古文尚書」といわれる。本書は先秦時代には「書」、のちに「尚書」と呼ばれていたが、宋代以後「書経」とよばれるようになった。

### 古列女伝・・・七巻

中国古代の女性の伝記。撰者は前漢の<sup>りゅう</sup>劉向。古代から漢代までの烈女（<sup>きょう</sup>節操が固く、気性の激しい女性）を母儀（母の模範）・賢明・仁智・貞順・節義など七目に分類し、各十五人ずつの伝記を記したものの。『列女伝』ともいう。